

## 絵画の中のはきもの

### 遠い地を想う

見 一 真理子

今年の夏は、リオデジャネイロオリンピック・パラリンピックで活躍する日本の選手たちの熱い戦いに連日釘付けになりました。南米で初めての開催地となったブラジルは、情熱的なサンバのリズムやカラフルな色彩に溢れた国という印象ですが、そのイメージとはあまりにもかけ離れた私の母が、もしかしたらこの地で暮らしていたかも知れないのです。母の昔語りを繰り返し聞いていた私にとってブラジルという遠い地への想いは、母と共有して自分の記憶の一部のように存在します。母の運命を大きく変えた瞬間には一体どんな力が働いたのでしょうか？

当時13歳だった母の家族11人は、ブラジル移民としてサンパウロへ向かうことを決意しました。父親（私の祖父）が親友の保証人欄に押した印一つのために家屋敷を全て失い、いつしか家族は希望の地をブラジルに求めて突き進んで行ったようです。しかし、神戸港から出航を目前に控えた家族に伝えられたのは、移民を主導してきた長男（叔父）が身体検査に引っ掛かり一緒に乗船できなくなったという通知でした。年寄り子供を含む右も左もわからない者たちだけで先にブラジルに向かわなければならなくなったのです。すぐ追いかけるからと長男は必死に説得しましたが、家族みんなの心の奥にしまい込んでいた「日本に残りたい」という思いが堰を切ったように溢れ出し、ブラジル行きを直前で取りやめたそうです。夏物の寝具と身の回り品だけの荷物が港に降ろされ、帰る家のない家族が

選んだ道は険しく苦勞の連続だったそうです。「なんであんな遠くに行こうとしたのか、今でもわからない…」と最近しきりに首を傾げる母を見ていると、その時の家族一人一人の葛藤や不安はどれほどだったでしょう。それは映画のワンシーンではなく本当に母が経験した出来事だったのです。平穏な時代に生まれた私には想像できないくらい大きなうねりの中をこの時代の人々は生きてきたのです。

私は「木型」をモチーフに「語り部たち」と題した作品を昨年から継続して描いています。今年は母の体験談をもとに「家族」を描きたいと制作を進めてきました。作品を見ていただいた方それぞれの記憶の断片に触れて、何かを感じていただけたらと願っています。

現在放映されているNHK連続テレビ小説「べっぴんさん」の舞台がまさに母たちの再出発の地となった神戸です。借家を探して歩き回り、途方に暮れながらも高台から眺めた景色はとても美しかったと母は言います。そして、物語に登場する靴職人の姿に父の面影を重ねて、何か不思議な繋がりを感じながら観ています。私がこうして生きていることは、両親がそれぞれ厳しい時代を生き抜いてきてくれた「奇跡」のおかげなのだ、改めて感謝の気持ちでいっぱいになります。